Japanese Physical Therapy Association

■骨・関節系理学療法　4

59　山梨県理学療法士会スポーツ理学療法部における教育・講演活動

加納朱加[1)], 小林幸一郎[1)], 宮尾一久[1)], 藤田理恵[1)], 小尾伸二[1)]

1) 山梨県理学療法士会　社会局　スポーツ理学療法部

key words　山梨県士会・スポーツ理学療法・講演活動

【はじめに】

山梨県理学療法士会ではスポーツ分野で貢献することを目的にスポーツ理学療法部を設立し活動を続け、各種スポーツ大会での活動や各種スポーツチームへの帯同なども行っている。さらに、スポーツ団体から依頼を受け実技を交えた講演活動も行い大変好評を得ている。そこで今回は、我々の活動を支える研修の内容と講演活動について紹介する。

【スポーツ理学療法部】

当士会におけるスポーツ理学療法活動は平成11年2月より開始。当初は「スポーツ理学療法勉強会」という士会員すべてを対象とした研修会からスタートし、平成11年6月にスポーツ理学療法委員会を設立。委員は22名の有志で構成され毎月2～4回の研修とスポーツ現場での活動が開始された。その後、冬季国体における理学療法サービスをはじめとする我々の活動が好評を得たことで様々なスポーツ関係団体から要請が続いた。そこで平成13年4月からは社会局スポーツ理学療法部として位置付けられ、部員24名でスポーツ関連の要請に応じて活動を続けており、研修もなお月に2回～3回のペースで行っている。

【教育研修】

研修は県士会員全てを対象とした「スポーツ理学療法勉強会」を年4回開催。スポーツ医科学や理学療法技術を中心に5年間で25回以上行っている。一方、部員を対象とした「スポーツ理学療法部研修会」は実技・理論研修を月2回。また、スポーツ選手のコンディショニングを行う実践研修を月1回行っている。ここでは、外傷や障害の病態・診断・治療をはじめ物理療法・徒手療法・装具療法などの技術と運動生理や栄養学など幅広い研鑽に努めている。

【講演活動】

我々の活動は「大会での理学療法サービスの提供」「チームに帯同した理学療法サービスの提供」「教育・講演活動」に大別される。「講演活動」は平成13年度が3件であったものが平成15年度は9件と3年間で依頼が多くなっている。講演依頼の内容は「スポーツ外傷・障害と予防法」「テーピング」「ストレッチ」がほとんどであり、「テーピング」「ストレッチ」については全て実技指導の依頼である。いずれの場合も主催団体から当士会に派遣依頼が提出され、スポーツ理学療法部で依頼内容に応じて適宜部員を派遣する形を取っている。

【考察】

我々は理学療法士がスポーツに関わる際、医学的職種として知識・技術を提供をすることが重要だと考えている。また、スポーツ現場における活動の中で、これまでに得た知識や技術を伝達し、スポーツ外傷や障害の予防にも貢献する必要があることを実感している。その手段の一つとしてスポーツ指導者や成長期にある選手に対しての「講演活動」は有意義であり、今後も継続すべき活動であると考えている。

■骨・関節系理学療法　4

60　平成15年度全国高等学校総合体育大会における支援活動

大山盛樹[1)2)], 横山茂樹[1)3)], 重松康志[1)4)], 谷川敦弘[1)5)], 中尾利恵[1)6)], 竹ノ内　洋[1)7)], 塩塚　順[1)8)]

1) 社団法人長崎県理学療法士会長崎ゆめ総体支援委員会, 2) 柿添病院, 3) 長崎大学医学部保健学科, 4) 三川内病院, 5) 老人保健施設恵仁荘 6) 乗松整形外科, 7) 橋本クリニック, 8) 虹ヶ丘病院

key words　全国高等学校総合体育大会・支援活動・スポーツ現場

【はじめに】平成15年7月28日から8月24日に、長崎県下で全国高等学校総合体育大会「長崎ゆめ総体」が開催された。この大会において（社）長崎県理学療法士会では「社団法人という公益性のある職能団体として地域社会への貢献する」という趣旨から支援活動を展開した。今回、その支援活動の実施状況について報告する。

【活動概要】（目的）選手がよりよいコンディショニングで安全にかつ安心して試合に挑める環境を提供する。（対象競技）サッカー競技・男女バスケットボール競技の2種目3競技とした。（支援体制）競技期間中に、各競技会場に救護班として県士会員を2名ずつ派遣した。（活動内容）参加選手を対象に1)試合前後におけるリコンディショニング、2)RICE等の応急処置、3)医療情報の提供を中心に行った。

【活動状況】（バスケットボール競技）8月2日から7日に男子は4会場、女子は5会場で開催された。参加チームは男女各59校、計118校、試合数は男女とも各々58試合、計116試合であった。派遣した県士会員は延べ64名、実人数50名であった。（サッカー競技）7月29日から8月4日まで6会場で開催された。参加チームは55校であり、試合数は計54試合であった。派遣会員は延べ51名、実人数36名であった。

【実施状況（バスケットボール競技）対応件数は、男子で延べ件数81件、実人数33名、女子で延べ件数32件、実人数25名であった。利用件数は大会前半に集中した。痛みを訴えた選手が最も多く、男子では39件（48%）、女子では26件（81%）であった。傷害部位は、男女とも足関節が最も多かった（30%前後）。施行内容は、男女ともテーピング施行が最も多く（40～50%）、次いでアイシングが占めた。（サッカー競技）対応件数は延べ件数71件、実人数50名であった。利用件数は大会前半戦に集中していた。主訴は痛みが最も多く、56件（78.9%）であった。傷害部位について足関節が33件（44%）と最も多かった。施行内容は、テーピング施行が39件（48.8%）と最も多く、次いでストレッチ、アイシングの順であった。

【今後の課題】利用件数はいずれの競技でも大会前半に多かった。これは大会前半に試合数が多いことや、後半戦に勝ち残る強豪校には帯同トレーナーが存在していたことが要因と考えられ、帯同トレーナーと連携が課題であった。またスポーツ現場では急性外傷への対応が求められることから、医師との連携体制や応急処置、テーピングに関する知識と技術の研鑽に努める必要があると思われた。今回のように県士会による支援活動はこれまでに前例がなく、長崎ゆめ総体における新たな試みであった。この活動を通して、痛みを持ちながらも競技に参加する選手の実状とスポーツ現場におけるニーズの高さを再認識できたことは有益であった。

NII-Electronic Library Service